

その原文は、外国公使の報告などに一部付収されているのみで、まとまって存在しているものはない。ただ『ジャパン・タイムズ』の相当の部分が国立国会図書館に存在しており、『メーブル』は、諸所に散在しているのをまとめると、その大部分がそろうと思う。

日本字の新聞としては、まずわが国最初の日刊紙『横浜毎日新聞』（のち『東京横浜毎日新聞』と改称）をあげなければならぬ。そのほか横浜関係の記事が多い新聞には、『東京日々新聞』『時事新報』がある。これらの新聞紙は公文書が存在していない状態のものでその欠を

補うことができる。ことに『横浜毎日新聞』は、地元の新聞紙として横浜関係の記事が最も多く、私もかつて『市史』第三卷下第三編第一章・第二章を起草するにさいして、同紙に依拠することがはなはだ大きかった。

## ② 明治期横浜の貿易とその資料

山口和雄〈創価大学教授・横浜市史編集委員〉

関港以降明治期を通じて、横浜が輝しい発展をとげたのは、なんといっても、横浜がわが国の主要貿易港としてさかんに輸出入を行ったからである。こんど、横浜に「開港資料館」ができて、そこに蒐集され、展示され資料の中心をなすのは、貿易関係資料とみてよいであろう。そこで、ここでは、外国貿易からみた明治期の横浜について述べ、それについての資料を若干紹介することにした。

### 一 貿易額と輸出入品

横浜は、明治前期においては、わが国最大の貿易港で、同港の輸出入額は全輸出入額の六〇%ないし七〇%を占め、輸入額も五〇%ないし七〇%を占めていた。明治後期に入っても、同港の貿易額は増進をつづけたが、その比重は低下し、輸出入額は四五%内外を、輸入額では二五%内外を占めるにすぎなくなった。それでも、輸出ではいぜん第一位の地位を保っていたが、輸入

- 一 貿易額と輸出入品
- 二 外商
- 三 売込商
- 四 引取商
- 五 日本直輸出入商

では明治二十六年頃から第一位を神戸港に奪われるにいたっている。神戸港がこのような発達をとげたのは、明治後期に綿糸紡績業、綿織物業等が大阪を中心に発達し、そのため神戸港が綿輸入、綿糸布輸出の中心港となったからである。

横浜港の主要輸出品は、明治前期には、生糸を筆頭に茶・銅・海産物などであった。初年には、蚕卵紙も多く輸出されたが、これはまもなく減少した。後期には、茶に代って羽二重・絹

ハンカチーフなどの絹物の輸出が伸びて第二の輸出品となり、雑貨の輸出も増大した。生糸は、最初は、ヨーロッパおよびアメリカに輸出されたが、明治十七年前後からおもにアメリカに輸出するようになった。茶も、もっぱらアメリカに、羽二重などの絹物は主としてフランス・アメリカ・イギリスに、銅はおもにイギリス・中国に、乾飽・するめ・昆布などの海産物は中国に輸出された。

主要輸入品は、明治前期には綿織物・綿糸・毛織物・砂糖・鉄などで、綿織物・毛織物はおもにイギリスから、綿糸はイギリス・インドから、砂糖は香港・蘭印・フィリピンなどから、鉄類はイギリス・ドイツ・アメリカから輸入された。それが、日露戦争頃までには、綿糸をはじめ砂糖・綿織物・毛織物の輸入がいちじるしく減少し、鉄類・機械類・綿・羊毛などの輸入が増大した。これは、その頃になると、国内の諸工業、ことに綿糸紡績業・綿織物業・毛織物業や台湾を中心とする製糖業がいちじるしく発達したためである。

日本、したがって横浜の貿易統計としては、明治十五年から毎年政府によって刊行されている『日本外国貿易年表』が最も詳細で、信頼すべきものであるが、十五年以前については、わが国の統計よりも英国の“Commercial Reports

from Her Majesty's Consul in Japan.”の方が正確とみられている。Commercial Reportsは、英領事が本国へ日本の商業状態を報告するに際し、開港場所在の外国人商業会議所作成の統計により、或は外字新聞所載の推定額を実際に近い値として報告したものである。現在、その原本を入手するのは困難であるが、複写を手に入れることは可能である。

## 二 外商

今日とちがって、明治期ことに明治三十年代頃まではわが国貿易は輸出入ともその多くが外国商人によって取扱われた。次の第一表によれば、明治二十年代には輸出入額の八〇%内外が、三十年代でも六〇%ないし七〇%が外商の取扱うところであった。横浜港で、外商と内商の取扱高が逆転するのは、第二表から推察すると、明治末が大正初年のことだったとみられる。なお、当時発刊されていた『横浜貿易新報』も、明治期横浜の貿易その他をみる上で、貴重な資料である。

横浜の外商は、明治二十二年一月刊行の高橋桂三郎編『東京横浜銀行会社役員及商館商店人員録』によれば、総数一二七軒、また、三十一年十二月刊行の『横浜姓名録』によるも、一三〇軒余

表一 わが国貿易額中内外商取扱比率(%)

年次	輸 出 額		輸 入 額	
	内商	外商	内商	外商
明治15年 (1882)	11.7	88.3	4.9	95.1
25	12.5	87.5	21.1	78.9
30	26.8	73.2	36.7	63.3
33 (1900)	29.1	70.9	39.6	60.4

各年度『日本外国貿易年表』による。

表二 横浜港輸出入額中内外商取扱比率(%)

年次	輸 出 額		輸 入 額	
	内商	外商	内商	外商
明治33年 (1900)	23.2	76.8	28.6	71.4
42年 (1909)	41.4	58.6	45.3	54.7

『横浜貿易新報』第3174号(明治43年2月23日)による。

であった。二十一年の場合には、一年の場合には、国籍がわかるので、それを示すと第三表のとおりで、英商が全体の三二%を占めて最も多く、それに清商・米商・独商・仏商・スイス商がつづいていた。

表三 外商国別表 (明治21年)

41軒	商
25	商
18	商
17	商
10	商
8	商
3	商
3	商
1	商
1	商
計	127

これらの外商の多くは居留地に店舗を構えていた。そのうち、最も古くから店を開き、規模も大きかったのは、英一番館といわれたジャードン・マセソン商会 Jardine Matheson & Co. 横浜支店である。同店は輸入品としては織物・綿糸・砂糖・鉄・セメントなどを、輸出品としては生糸・屑物・茶・銅・雑貨などを取扱ひ、神

戸や長崎にも店をもち、貿易のほか、保険・海運業務をも兼営していた。なお、当時のジャーデン・マセンの尨大な資料は、現在、英国のケンブリッジ大学図書館に寄託されており、わ

が国の学者でそれを閲覧し、研究するものも現われてきたので、同商会の取扱ったわが国貿易の状況も次第に明らかになることと思う。米二番館の米商ウォルシュ・ホール商会 Walsh Hall Co. も古くからの商館で、輸入品としては、織物・雑品類を、輸出品としては、茶・ハンカチーフ・麦稗真田・雑貨などを取扱った。

最大の輸出品たる生糸を最も多く取扱った外商は、甲九十番館といわれたスイス商シール・ブレンワルド商会 Siber Brenwald & Co. (後のシール・ウォルフ商会 Siber Wolf & Co.) で、外商による横浜生糸輸出高の二〇%内外を取扱っていた。同商会について生糸を多く輸出した外商は、スイス商 H・シール商会、英商ジャーデン・マセン商会、米商ユリス・ピラ商会 Ulysses Pilla & Co. など。茶を多く輸出した外国商館は、英商モリアン・ハイマン商会 Mouryan Heiman & Co.、米商スミス・ブーカー商会 E. K. Smith、英商ヘント商会 H. J. Hunt などであった。

羽二重は明治三十年前後から輸出がさかんになり、おもにその輸出を担当する外商も出現し

た。米商イー・テー・マイン商会 E. T. Mason & Co.、英商ストローム商会 Strome & Co.、米商ポーラック兄弟商会 Pollak & Co. などとその代表的なものであった。

海産物はおもに中国に輸出したので、その輸出を担当したのは清商であった。明治二十一年当時は、横浜に二五軒ほどの清商がおったが、その後減少して数軒となった。その中では、永義和・大徳堂・順和棧などが中心であった。

輸入では、織物・綿糸・金巾などの輸入は、ジャーデン・マセン商会を筆頭とする英商が多く取扱った。英商はこのほか、鉄・砂糖・毛布・セメントなどの輸入も担当した。米商は石油・鉄・時計・織物などを、スイス商は時計を、ドイツ商は機械・染料などを多く輸入した。

### 三——売込商

地方荷主の依頼を受けて、製品を外商(または日本直輸出商)に売込む商人を売込商または売込問屋と呼んだ。荷主と売込商との間は、一定の口銭による委託販売が普通であったが、売込商が買取ることもあった。また、売込商が荷主に前貸金を貸与して荷物を独占的に集荷する方法をとることもあった。とくに、生糸売込商の場合は、明治二十年前後からこうした方法を

とることが多くなった。この場合は、口銭と前貸金の利子とが売込商の収得となったわけである。

#### 生糸売込商

最大の輸出品が生糸だったので、売込商のうち、大商人が多く、最も勢力のあったのは、生糸売込商である。生糸売込商は、横浜に明治期を通じて二十数軒ないし三十数軒あったが、興亡はげしく、明治二年前後から同二十一年頃まで続いたのは、原善三郎・茂木惣兵衛の二店にすぎず、二十年代から四十年代にかけ続いたのは、原・茂木・小野光景・渋沢作太郎・若尾幾造・渡辺文七・安西徳兵衛・山田駒吉の八店である。これに、二十六年以降になると、神戸の神栄会社横浜支店が加わり、有力生糸売込商を構成していた。そのうちでもとくに有力だったのは、原・茂木・渋沢・小野の四店で、明治二十年代以降においては、生糸売込総高の六、七割はこの四店の取扱うところであった。ことに、原・茂木は二大売込商で、横浜財界の巨頭でもあった。しかし、茂木は大正九年恐慌の際破産した。破産のとき、金融機関が調査した同店の経営資料は若干残されているが、明治期のものは残っていない。原は原存しているが、同家にも当時の経営資料はほとんど残存していない。この点は渋沢・小野も同様であるが、ただ渋沢商店については、関東大震災以後の経

営資料が若干存在し、神栄株式会社の営業報告書も残されている。これらにもとづく研究は、『横浜市史』補遺編で発表される予定である。

このように、明治期の生糸売込商の経営資料はほとんど残されていないが、原商店では明治二十七年に『横浜生糸貿易十二年間概況』を、同二十九年から大正七年までは毎年『横浜生糸貿易概況』を刊行し、茂木商店も明治二十一年から『蚕糸統計要覧』を、同二十五年からは『蚕糸貿易要覧』を毎年発刊し、大正七年に及んでいる。これらは、両商店の内部資料ではないが、明治期の横浜生糸貿易を研究する上で貴重な報告書である。今日では、入手困難であるので、その大部分を『横浜市史』資料編七～十五巻に収めておいた。

**製茶売込商** 明治前期の製茶売込商はその数十軒、後期になると次第に減少し、四十年には十三軒となった。このように減少したのは、茶の輸出が次第に減退したのと、三十九年頃から製茶売込商で静岡または清水に本拠を移すものがふえたがためである。明治期を通じ、横浜の代表的な製茶売込商は、大谷嘉兵衛・吉永仁蔵・岡野利兵衛などであった。大谷嘉兵衛については、伝記が刊行されている。

**その他の売込商** 生糸・製茶以外の売込商としては、絹物売込商・海産物売込商・銅鉄売込

並引取商・麦稗真田売込商・雑貨売込商などがあつた。

絹物売込商は、明治三十年前後から絹物、ことに羽二重の輸出が増大するにつれ出現した。小規模で基礎の薄弱なものが多く、主要なのは、上野元吉・安田林七郎・神山喜一郎（本店相生）・堀井辰次郎（本店福井）・書上文左衛門（本店桐生）・若林鱗三郎（本店金沢）・忽那惟次郎など、数軒にすぎなかった。

海産物売込商も明治期を通じ二十軒ないし四十軒ほどあつたが、これも浮沈はげしく、引続き営業したのは、渡辺福三郎・岡野利兵衛・辻孝助・吉永仁蔵・安藤半七などであつた。とくに、渡辺福三郎は最大の海産物売込商で、かつ屈指の資産家であつた。なお、同家には明治期の経営帳簿が若干残されている。

銅鉄売込並引取商だけは、売込と引取を兼ねるのが普通で、その多くは銅を売込み、鉄を引取るのを業務としていた。その数十軒軒ないし二十軒軒で、主たるものは伊藤市五郎・渡辺貞次郎・田中利喜蔵・田中茂などであつた。

麦稗真田売込商が独立したのも、麦稗真田の輸出が増大した明治三十年前後からで、まもなくその数十軒軒に及んだようであるが、浮沈はげしく、引続き存在したのは林善市・米倉半蔵・山口平三郎・酒井エイの四軒にすぎなかった。

雑貨売込商と呼ばれるものは、明治二十年代から三十年代にかけて五十軒軒もあつたが、これも興亡はなはだしく、引続き存在したのはごくわずかであつた。

#### 四——引取商

外商（または日本直輸入商）から輸入品を取り、それを国内各地の間屋その他に販売する商人を引取商または引取問屋と称した。明治期横浜の引取商には、洋糸織物引取商・西洋小間物引取商・砂糖引取商・石油引取商・銅鉄売込並引取商などがあつた。

洋糸織物引取商は、明治期を通じ十軒軒ないし三十軒軒存在したが、その主なものは平沼専蔵・薩摩治兵衛支店・森伊作・依田弥助・大浜忠三郎などであつた。薩摩治兵衛は東京の有名な和洋木綿商で、その横浜支店は明治十二年に開設され、その後主として金巾の取引に従事した。

砂糖引取商は、明治三十一年の調査では横浜に七軒ほどあつたが、その後砂糖の輸入減少にともない少なくなり、四十年には安部幸兵衛・増田増蔵の二店のみとなった。この両店は、砂糖ばかりでなく、石油の引取も兼営した。石油引取商はこの安部・増田のほか、なお数軒あつ

た。西洋小間物引取商もかなり存在したようであるが、詳細は明らかでない。

安部・増田両店も大正九年恐慌の際、大打撃をうけて休業した。この場合も、休業当時金融機関が調べた経営資料が若干存在するが、明治期のものは残っていないようである。

## 五——日本直輸出入商

わが直輸出入商も、明治後期には次第にその数を増し、取扱高も増大した。前掲第二表に示したように、横浜港では明治四十年代には全輸出入額の四〇%余はわが直輸出商の取扱うところとなった。

横浜の直輸出商としては、生糸直輸出商が中心で、すでに明治十二、三年頃から同伸会社・貿易商会・イロハ商会・扶桑商会などが相ついでおこり、三井物産会社もこの頃から生糸直輸出に乗り出した。しかし、十分の発展を見ず、十八、九年頃になると、三井物産をはじめ多くの商社が生糸直輸出を中止し、それに従事するのは同伸会社と貿易商会だけとなった。この両店の営業も、政府から横浜正金銀行を通じ貸与

されていた海外荷為替資金が廃止になったこともあって、次第に困難となった。かくて、貿易商会は明治二十年代に入ると業務不振となり、二十六年には新たに設立した横浜生糸合名会社がこのに代り、同伸会社も二十二年頃から衰え出した。その後も生糸の直輸出はあまり伸びなかったが、それが明治三十年代後半から四十年にかけて急速に発展するにいたった。それは、この頃になると、三井物産が積極策を講じて生糸直輸出の拡張をはかるようになったからである。また、横浜生糸合名会社の輸出も伸び、明治三十三年頃からは原商店も生糸輸出部を設け、生糸の直輸出を行うにいたった。かくて、明治四十五年には、生糸輸出においては、内商の取扱高が外商のそれを凌駕して五三%を占めるようになった。ただ、このような状態になったにもかかわらず、わが生糸直輸出商も外商と同様、大部分の荷物を売込商を介して買取り、それを輸出していたのである。

製茶直輸出商も、明治前期には横浜に一、二軒存在したが、その後、茶貿易の不振にともない、横浜に代って清水や静岡に出現するように

なった。これに対し、明治三十年代以降横浜の主要輸出品になった絹物の場合は、十軒内外の直輸出商が出現した。そのうち主なものは、茂木商店輸出部・三井物産・高島屋・堀越商会などで、これらの商店が中心となって、絹物でも、おそくとも大正初年には、内商取扱高が外商のそれに対し優位を占めるにいたった。

直輸入商については、直輸出商よりもさらに明らかでないが、明治四十三年刊森田忠吉編『横浜成功名譽鑑』によれば、横浜直輸入商には米穀肥料輸入商・砂糖石油輸入商・鉄機械類輸入商・洋織物輸入商・西洋小間物及雑貨輸入商・皮革輸入商・薬品染料輸入商などがあり、各商とも、その数少なくて二、三軒、多いのは十軒余に及んだ。また、三井物産のように直輸出と直輸入を兼営するものもあった。

以上のわが直輸出入商の経営資料もほとんど残っていない。横浜生糸合名会社の資料は、大正十年代のものが多少存在するが、明治期のものはほとんど残っていないようである。ただ、三井物産の資料は三井文庫に所蔵され、その中には明治期のものもかなり存在する。